

赤十字国際委員会ニュースレター

2018年5月 第28号



目次

ICRC とテクノロジー	1
日本と ICRC の関わり	3
赤十字の輪・駐日事務所通信	4

ICRCとテクノロジー

近年、科学技術の進歩や情報のデジタル化によって、私たちの日常生活が一変したと言っても過言ではありません。同じように、人道支援を行う ICRC の活動や人道的価値観の啓発においても、さまざまな変革が遂げられています。今日の現場のニーズに応えていくためにも、民間セクターや学術分野の専門家などとの協力が欠かせない時代に私たちも突入しました。

最新技術を使った新たなアプローチ

アプリの開発

ICRC は今年3月、拡張現実 (Augmented Reality : AR) の技術を用いた「Enter the Room (部屋に入る)」という無料の iOS ユーザー向けアプリをリリースしました。Pokemon Go や Snapchat といったゲームでおなじみの AR ですが、紛争の現状を伝えるために使われるのは初めてのこと。ストーリー

は、都市部に住む少女の部屋の中で展開されます。部屋の入り口を設定し、そこから一步踏み出すと、まるで自身が部屋に入ったかのような感覚に陥ります。部屋の中を歩いてみると、ぬいぐるみやベッド、学習机があり、少女が描いた絵なども目に入ってきます。しかし、数分ごとに年数の経過を示す表示が現れ、空爆や爆発の音が聞こえてくると同時に、部屋の様子も変わっていきます。少女の心を映し出す絵からも、数年にわたる争いがもたらす残酷な現実を知ることができます。設定を都市部の少女の部屋とすることで、平和な日々を送っている人たちにも紛争下でのできごとを体感してもらおうという狙いです。アプリ以外にも、プレイヤーの物理的視点で進む「ファースト・パーソンシューティングゲーム」のひとつ「ARMA3: Laws of War」の開発にも携わりました。戦争のルールを守る上での戦闘員の役割と責任を、プレイしながら自然と体得するというもの。2017年売上純利益の半分(約1880万円)が、ゲーム会社より ICRC の活動に寄付されました。



新たな支援ツールの開発

最新技術は、戦争で傷ついた人々を力づけることにも活用されています。昨年6月、ICRC は「Japan XR Hackathon 2017」を複数のゲーム関連会社と共催。XR とは、AR、仮想現実 (VR)、複合現実 (MR) の総称で、新進気鋭のアイディアに溢れた技術者た



ガザ地区の街角で携帯電話や懐中電灯を充電中。モバイルテクノロジーは必要不可欠なライフライン。
ガザでは頻繁に電気の供給がストップしてしまうため、無料で提供される充電バッテリーが役立つ

ちが、人道支援の現場で役立つツール開発に挑戦しました。ICRC 大賞には、戦闘に巻き込まれて足を失った子どもたちがゲーム感覚でリハビリに取り組めるツール「Happy Children」が選ばれ、副賞として開発資金 450 万円が授けられました。私たちはこのように、先端技術を生かした人道支援のあり方も模索しています。

企業・学術分野との連携

また、企業とのパートナーシップも欠かせません。例えば、紛争で離れ離れになった家族の再会を支援するため、マイクロソフト社とパートナーシップを結んで、顔認証技術を取り入れています。また、ナイロビにある ICRC の大きな倉庫では、電力供給が途切れ途切れになる課題を解決するために、小規模発電網の開発分野で活躍するアセア・ブラウン・ボベリ (ABB) 社が太陽光発電を活用した電力供給システムを構築。日々の ICRC の業務を支えています。

企業だけでなく、学術分野との連携も、革新的な解決策の発見や支援の効率性の向上を目指すうえで有益です。例えば、最先端のロボット工学や生物機械工学技術などによって、障がい者の能力拡張を図るため、昨年 4 月に東京工業大学とスイスとの国際共同ワークショップに参加しました。

その一方で負の側面も

科学技術の進歩が私たちの活動を助ける一方で、新たな懸念も浮上しています。

まず、戦闘の方法や手段が変わってきています。殺人ロボットやレーザー武器など、昨日まではフィクションだったものが、明日には大惨事を招く武器として戦場で用いられるかもしれません。武力紛争の当事者が、無線操縦無人機のような遠隔操作による武器システムを用いるケースが増えてきています。自動制御兵器も普及してきていて、殺人ロボットのような攻撃の判断すら無人化された兵器の導入も、昨今検討されています。

また、サイバー戦争も想定されます。サイバーネット

ワークが一般的に脆弱であること、そしてサイバー攻撃が潜在的な人道的代償をはらんでいることから、ICRC は、武力紛争に絡めたサイバー攻撃についても危機感を抱いています。例えば、国家のコンピュータネットワークが被害にあった場合、水道や電力、医療サービスといった生活基盤を壊される危険性があります。また、万が一 GPS システムが麻痺すると、ダムや原子力発電所、航空管制システムのような、コンピュータへの依存度の高い公共設備が影響を受け、民間人からも犠牲者が出てしまうかもしれません。ネットワークはあらゆる部分が相互に関連しているため、一部に対する攻撃が他の部分やシステム全体へ拡大することも懸念されます。サイバー攻撃によって何十万もの人々の命、健康、生活が脅かされてしまいかねないのです。攻撃による人道的被害は計り知れません。戦争にもルールと制限があり、それらは銃やミサイルといった従来の武器の使用だけでなく、サイバー戦争にも適用されます。私たちはもう一度、民間人保護のために、戦時の決まりごとである国際人道法の基本原則に立ち返る必要があります。

ICRC とテクノロジーのこれから

サイバースペースや新型兵器は、新たな形態で戦争が行われうる領域を作りだしました。しかし、紛争下においては国際人道法の原則がすべての戦闘行為に適用されることは明らかで、今後も法の遵守を国際社会に訴えていく必要があります。その上で、将来起こりうる最新技術を使った戦争から民間人を守るために、より具体的なルールを考えることも必要となってきます。

日々革新を遂げるテクノロジーは諸刃の剣。効率性や人間の進化において多くの可能性を秘める一方で、使い方次第で倫理や既存のルールに抵触し、人間の尊厳を脅かすリスクも伴います。今日の長期化・複雑化する紛争の中で変化する人道ニーズに応えるために産学連携なども視野に入れながら、最先端の技術が紛争現場にどんなメリットをもたらしつつあるのか、国際人道法の守護者としてさまざまな角度から引き続き検証することが私たちには求められています。

日本と ICRC の関わり —最終話

日本と ICRC の関係をひもときシリーズでお伝えします

日本から世界の生きる力を支える

遡ること 2010 年夏。駐日事務所開所から一年が経ったタイミングで本コーナーが始まりました。組織の性格上、現代日本にはあまり馴染みのない ICRC ですが、一世紀半の組織の歴史を紐解いてみると、日本との関わりがそこそこに見られました。最終話となる今号は、2019 年に開所 10 周年を迎える駐日事務所の展望と抱負で締めくくります。

紛争下の人たちの声を届ける

日本にとっては幸い戦争は過去の出来事。毎年 8 月には戦争についての番組や特集が組まれるなど、世間やメディアの関心が高まります。世界がうらやむ平和を享受している私たちが、過去を知り、時に向き合う大切な時期なのかもしれません。

一方で、日本の外に目を向けてみると、日々凄惨さを極める戦場で行き場をなくし、一日も早く平和が訪れることを心待ちにしている人たちがたくさんいます。遠く離れていても、同じ時代に生きる仲間として彼らの声や姿を無視することはできません。私たちは、今後も紛争下で力強く生きようとしている人たちに光を当て、同時に戦時の決まりごとである国際人道法 (IHL) の「守護者」として彼らの痛みや苦しみを和らげ、無くすことに力を尽くします。

人道外交と国際人道法の普及

2004 年に日本は 1949 年ジュネーブ諸条約の二つの追加議定書に加入したのをはじめ、対人地雷禁止条約やクラスター弾禁止条約等の IHL に関連した国際的なルールにも締結しています。そうした意味からも日本は、アジア諸国を先導する立場でもあり、ジュネーブ諸条約への加入を促す努力をこれまで行ってきています。ICRC は、必要に応じて適切な支援と助言を行うと同時に、日本政府と協力して、国内外の IHL の履行確保に尽力しています。

国内においては、2017 年に、外務省や日本赤十字社が共催して、国際人道法国内委員会を再開。国内での普及および促進に向けて、関係省庁や赤十字運動が議論を重ねて、具体的な取り組みを講じていくことが期待されています。ICRC は同委員会に対して専門的な見地を提供しつつ、議論の活性化を促します。

人道外交に関しては、駐日事務所設立以来、総裁や事業局長などの幹部がジュネーブ本部から来日し、政府関係者と喫緊の人道課題や、紛争地における支援などについてのハイレベルな対話を設けています。また、防衛省・自衛隊とは、捕虜・被拘束者の保護や戦闘の手段・方法などについて IHL に基づいた指導や助言を行い、隊員の養成・訓練などにも積極的に関与しています。その他、シンクタンクや市民社会とも対話や協力を通じて IHL や人道問題についての関心を喚起するとともに、専門家を交えた勉強会等においては議論を先導しています。さらに、紛争地で多様化・複雑化する人道ニーズへの対応も見据えて、日本の民間セクターとの連携も模索し始めています。



国際人道法 (IHL) 模擬裁判大会国内予選

関心と呼びこみ、「自分事」に近づける

「辛い」「悲しい」「重い」といったイメージのある戦争を扱う組織として、日本では、マンガや映画、バーチャルリアリティ、ゲームなど、エンターテインメントやイノベーションと融合させたアプローチによって関心を持ってもらうよう取り組んでいます。また次世代を対象に、大学での講義に加えて、模擬裁判やヤングリポーター・コンペティションも定期的を実施しています。毎年 6 月には、「ショートショート フィルムフェスティバル & アジア」に参加し、「戦争と生きる力プログラム」をお届けしています。



日本人の顔の見える支援、ということでは、日本赤十字社との連携も欠かせません。現場で働く日本人職員を増やしていくなかで、日赤とも協力して医療スタッフを ICRC の活動地に派遣しています。

Even wars have limits - 戦争とはいえやりたい放題は許されない

このスローガンを掲げながら、今後も日本の持つポテンシャルをあらゆる形で現場に届けていきたい。これが、私たち駐日事務所の願いです。

5月8日から公式 Facebook を始めました。世界 80 カ国以上から届くエピソードや、一世紀半のデータを抱えるアーカイブスからの写真や資料、小話、また日本におけるイベントなど、幅広く発信していきます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

⇒フルバージョンはこちら
<http://jp.icrc.org/jpm-mission/>

赤十字の輪

ICRC クアラルンプール地域代表部、 キャンベラ事務所でのインターンシップを終えて

ICRC 駐日事務所では、関西学院大学と協定を結び、2014 年から ICRC の海外拠点でのインターンシップを実施しています。2017 年 10 月から 2018 年 2 月まで、マレーシアとオーストラリアでインターン生として活動してきた同大学総合政策学部国際政策学科の巽音(たつみ・おとね)さんに話を聞きました。

出発前は派遣先での活動や業務を想像できず、国際法、ましてや国際人道法 (IHL) についても知識がなかったため、現地での業務についていけるかが一番の不安要素でした。一方で、さまざまな背景を持つ人材が集まる国際機関で働くことが長年の夢だったので、ワクワク感もありました。



クアラルンプールの模擬裁判場でボランティアおよび関係者と

マレーシアでは、IHL のロールプレイ・コンペティションや模擬裁判の運営を手伝いました。開催校となった大学の学生ボランティアと協力して円滑な進行ができ、職員からだけでなく参加者や学生ボランティアの方々からも感謝された時は嬉しかったです。オーストラリアでは政策担当官の指導のもと、大手シンクタンクのブログにシリーズで記事を寄稿するプロジェクトを企画から担当。自分が執筆した記事が掲載された時の達成感は一ひとしおでした。

ICRC は、紛争や暴力によって影響を受けた人々を支援する一方で、国際社会の意思決定の場でも国際人道法の観点から意見を述べる組織です。そんな組織での経験を生かし、将来は人道支援分野において、最前線での支援と国際会議での交渉、どちらにも対応できるようになりたいと思っています。

→フルバージョンはこちら
<http://jp.icrc.org/2018/05/21/internship/>

駐日事務所通信

SSFF&ASIA 2018 今年は 13 作品を上映!

米国アカデミー賞公認の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア (SSFF&ASIA)」が 6 月 4 日から始まります。作品を通してさまざまな境遇の人々の人生や想いに触れ、身近な人を想いやり、助け合うことの大切さを感じてもらいたいと願って、ICRC が立ち上げた「戦争と生きる力プログラム」も今年で 4 年目。国や時代、ジャンルも異なる多彩なラインナップとなっています。ぜひご覧ください。



上映スケジュール

6 月 8 日 (金)	11:20-13:10	プログラム 1	表参道ヒルズ スペースオー
6 月 9 日 (土)	20:00-21:50	プログラム 2	表参道ヒルズ スペースオー
6 月 21 日 (木)	13:30-15:20	プログラム 2	iTSCOM STUDIO&HALL 二子玉川ライズ
6 月 23 日 (土)	15:40-17:30	プログラム 1	iTSCOM STUDIO&HALL 二子玉川ライズ

プログラム 1 と 2 の上映作品は異なります。 詳細はこちら <http://jp.icrc.org/event/ssff-asia-2018/>



A. Suzuki/ICRC

なお、表参道ヒルズ向かい側にある、カフェ ル・ポミエでは、今年もチャリティーメニューを提供しています。ご注文いただくと、お店特製の MIX ジュースがもれなくついてきます。ぜひお試しください。

赤十字国際委員会 駐日事務所

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-11-36

レジデンスバイカウンテス #320

Tel: 03-6628-5450

Email: tok_tokyo@icrc.org jp.icrc.org

表紙の写真: 人道支援と民間技術、障がい、イノベーションがテーマのプロジェクト「Enable Makeathon」。地方に住む障がい者を対象に参加者が自分たちの作品を披露

[facebook.com/ICRC.jp](https://www.facebook.com/ICRC.jp)

twitter.com/ICRC_jp



ICRC